

教育の行き過ぎ

そういうわけで、私は、今の学校教育が、どの学科もよくできる児童・生徒、あらゆる点で過不足のない円満な人間を育てることを理想とし、これに向かって努力しているのを、教育の行き過ぎだと思っています。

とりわけ、このような理想に照らして子どもの短所と思われるものを残らず探り出し、これを改めるように要求する今の通信簿は、何としても有害無益の存在で、一日も早く廃止すべきだと思います。

もちろん、何でもよくできる人間もあった方がよろしい。しかし、それは、他のことはできないがこのことだけはよくできる、という人間以上に尊敬されなければならないように考えられている今の教育界の風潮は、明らかに誤っていると思います。何でもよくできる人も、何か一つだけがよくできる人も、同じように尊敬されなければなりません。

およそ、人間というものは、幼児期の子どもを見ればよくわかるように、常に周囲のものに興味をもち、これを理解しようと努めるものです。つまり、勉強したいという気持は、食べたいという欲望と同じように、だれもが持っている本能の一つだと私は思っています。

興味と教育との関係

幼児をごらんください。興味のある対象に取り組んだら、何もかも忘れてしまって、ただ一心にそれを追求しているではありませんか。

だれでも、何事かに興味を抱いて、それに取り組まずにはいられないように生まれついているのです。そして、一度何事かに取り組んだら、だれでも、その面の能力をすばらしいものに育て上げずにはおかないのです。

ただ問題なのは、まれに、何事にも興味を示さない子どもがいることです。これは、言わばエンジンのない自動車のようなものですから、これでは人間としての成長発展が遂げられません。

しかし、これとても、特別にそういう性格に生まれついたものでは決してありません。そういう無気力さは、生まれつきではなくて、育てる側に多く責任があるのです。

こういう子どもに対して、ただ「もっと積極性がほしい」「意欲的であれ」と言ったところで何になりますか。それは、病人に対して病状をありのままに知らせ、落胆させておいて、「あなたは、この病気を直す義務があります。一日も早く直すように努力しなさい」と説教するようなものです。全くばかげたことだと思いいになりませんか。

通信簿の記録性と通知性

通信簿は、言わば、病人のカルテです。そのような性質の通信簿を、子どもの家庭に送るのは、それだけでも問題があります。

医師、つまり教師が、記録しておいて指導の参考にすべきものを、患者である子どもの家庭にそのまま知らせて、それで良い結果を期待しても、それは無理というものです。

家庭に送る通信簿は、患者である児童、生徒の気持ちを明るく引き立たせ、生き生きとさせるものでなくてはなりません。「家庭の協力を求める」と言えば聞こえはよいが、**事實は決してそのようなものではありません。**

教師が、当然負わなければならない教育の仕事を、家庭に転嫁するものであって、このような通信簿は、**即刻廃止しなければならないものだ**と思います。

前回述べましたように、社会が、万能の人間よりも、一芸に秀でた人間を求めているのですから、学校教育でも、一芸に秀でていれば、何もそれに文句をつけるすじあいはないはずです。

論語にも、「君子は多能ならず」といわれていて、人間は多能である必要は全くないので、学校教育で、多能を求めるようなことはすべきではないと思います。

これも、なまじ通信簿などというものがあつたために、正に「毛を吹いて傷を求める」ような愚かなことが助長されたものではないでしょうか。

能力の二面性

この考え方が、大学の入学試験にも及んでいます。大学に入つてから専攻する学科には全く縁もゆかりもない科目を、入学試験に課している大学が、何と多いことでしょう。

一度入学してしまえば全く省みられない学科に不得意であるばかりに、専門とする学科にはすばらしい才能を持っている学生が、入学することができないで、あたらその才能を伸ばすことができないでいる、という例が今の世の中には随分多いだろつと思つます。

もちろん、これは、その学生にとつて一生の大きな損失ですが、わが国の社会にとつても、大変な損失だといわなければなりません。

社会に貢献する人間の能力というものは、何でも平均してできるという能力ではないでしょう。現実の社会が求めている人間の能力は、特殊な能力です。

学校で優秀な人間が、社会で必ずしも成功しないといわれまふが、今の学校教育を見れば、それは当然のことだといわなければなりません。